

本を「語る」女たち

アメリカにおける「オプラズ・ブッククラブ」の隆盛と
その影響について

尾崎 俊介

アメリカの黒人女性タレントであり、また女優としても高い評価を受けている Oprah Winfrey (1954-) が「オプラ・ウィンフリー・ショー」という昼下がりのトーク番組を始めたのは 1986 年 9 月 8 日のこと。ショーはシンジケートを通じて全米各局で放送され、週間視聴者数 4 千 6 百万人という大成功を納めることになる。

そしてこの番組が始まってからおよそ十年後にあたる 1996 年 9 月 17 日、「アメリカを再び読書好きにさせる！」(to get the whole country reading again!) という威勢のいい掛け声の下、このショーの中の一つのコーナーとして「オプラズ・ブッククラブ」(Oprah's Book Club) が誕生する。これはオプラの番組が十年を経過してマンネリ化し、その視聴率が低下してきたことに対する対応策であったとも言われているが、理由はともかく、オプラは自らが主宰するテレビ番組のテコ入れのために「本」を、とりわけ「文学作品」を、使うことを選んだのである。そして記念すべきその第一回目には Jacquelyn Mitchard の *The Deep End of the Ocean* (1996) という小説が、また翌月に行われた第二回目には Toni Morrison の *Song of Solomon* (1977) が取り上げられるという調子で、大体月に一回のペースでオプラと共に現代小説を読む、という趣旨の「オプラズ・ブ

ッククラブ」が開催されるようになっていく。そしてこのブッククラブはたちまち大変な評判となり、オプラ・ウィンフリー・ショーの人気を再燃させることに大いに貢献したのである。

と、このように説明すると、有名タレントがホストとなっている午後のショー番組の一コーナーとして「ブッククラブ」なるものが生まれ、人気を博しているだけのことのように見えるかも知れない。

だがこのオプラズ・ブッククラブ、単に人気のあるテレビ番組の一つというだけでなく、実は今、アメリカにおいて人と文学作品がどのような形で接しているのかを考える上で、なかなか興味深い視点を提供しているのである。

オプラズ・ブッククラブの衝撃

では、そもそも「オプラズ・ブッククラブ」の何がそれほど視聴者にアピールしたのであるだろうか？

単に優れた現代小説を紹介するというのであれば、その種の書評番組は以前から存在した。ただ従来型の書評番組は、しかるべき専門家、例えば大学教授であるとか文芸評論家などが、優れた小説を視聴者に一方的に紹介するというスタイルで運営されてきたのであって、それはいかにも教養番組的なものであり、教養番組を好むような視聴者に向けて放送されてきたと言ってよい。ところが、オプラ・ウィンフリーのブッククラブは、上に述べたような教養番組的なものとはまったく異なる形で運営されていたのである。

まず、オプラの番組は午後の時間帯に放送されるので、これを見られるのは家庭の主婦に限られるというところがある。それも共働きする必要のない中流階級の主婦。昔ながらの書評番組が教養主義的であり、どちらか

たとえば「男性の専門家」が「男性の教養人」に向けて発信するようなタイプの番組であったのに対し、オプラの番組は、最初から女性を、それも中流階級の主婦を、主たるターゲットとして作られていたのだ。

実際、「オプラズ・ブッククラブ」では、スタジオのセッティングからしてまるでオプラの自宅サロンのようにしつらえられており、そのオプラのサロンに、その日取り上げる本の著者と、一般視聴者から選ばれたゲスト（大半が女性）が招かれた、という設定で番組が進行する。またこれに加えてスタジオの外周にある観客席には大勢の観客（これも大半が女性）が陣取っているわけだから、番組全体がいわば男子禁制の「女の園」の様相を呈していた。

そして、女性にとっては非常に居心地のいいその空間の中で、サロンの女主人たるオプラ自身が、当該の小説を読んでいかに感動したか、その本によって自分の生活や考え方がいかに劇的に変わったか、というようなことを情熱をもって語るのだ。そして個々の登場人物の人間性や印象的な言動に触れ、それについて自分がどう思ったかなどを熱く語る一方、サロンの客人である一般人ゲストにも意見を求め、さらには著者にも尋ね、そうやって自らの、そしてゲストたちのきわめて個人的な読書体験を引き出しながら、当該の小説がいかに読むに値する本であるかを、テレビを見ている（女性）視聴者に熱を込めてアピールしていくという形で、本の紹介がなされていくのである。

しかもこの番組には権威的な男性知識人がほとんど登場しないので、ホストたるオプラはもちろんのこと、サロンに招かれた女性ゲストたちもまた、心置きなく女性的な目線で自由に本のことを語り合えるメリットもあった。例えばオプラがトニ・モリスンの *The Bluest Eye* (1970) という小説を視聴者に勧めた時の口調は以下のようなものである。

If you don't like this book, then I don't have nothing else to say to you. You will like this book. OK? I love this book . . . You cannot read *The Bluest Eye* without having it touch your soul . . . If it doesn't, then I don't know who you are. ¹

「私が好きなのだから、あなただって絶対好きはず」——こうした論理を超えた論理によって文学作品を評価し、確信的にそれを人に勧めてしまうということ。従来型の書評番組の中では、このような本の勧め方はあり得なかった。

「オプラ効果」のもたらしたもの

そしてこの人気司会者オプラの巧みな話術と、その情熱的な、そして断定的な物言いに浮かされるように、この番組の視聴者たる女性たちは本を、すなわち現代小説を、買い出したのである。

オプラズ・ブッククラブでは、他の専属スタッフなどではなく、オプラ自身がショーの中で取り上げる小説を選ぶのだが、彼女がある小説を選定し、「来月はこの本を読みます」ということを番組内で発表すると、ニューヨークなどの大都市の公共図書館では、当該の本に対し、立ちどころに4千人ほどの人が予約を入れると言われている。そうになると、仮にそれらの人たちが皆一日で本を読み終え、図書館に返却したとしても、4千人全員が読み終わるには11年掛かるのであって、そこまで悠長に待ってられない人は、当該の本を求めて書店に急ぐことになる。だが、いかな大書店といえどもオプラの番組の視聴者の数ほどは本を用意できるはずもないのであって、どうしても客同士で在庫の奪い合いになることは避けられない。それゆえ熱心なオプラのブッククラブの視聴者になると、選定本の

発表の瞬間を玄関先でコートを身に着け靴を履いた状態で待ち構え、発表されると同時に家を飛び出して書店まで駆けつけるという。²

実際、オプラの番組で取り上げられた本は、そのことを示すロゴ・シール（図1）が貼られ、書店で一番目立つところに平積みで山積みされ、飛ぶように売れた。オプラが選定した本は、確実にミリオンセラーになったのだ。その著しい宣伝力たるや、「オプラ効果」（Oprah Effect）という経済用語まで生み出されたほどである。³



図1 オプラズ・ブッククラブのロゴ

ではその「オプラ効果」というのがどれほどのものだったのか。ここで再びトニ・モリスンの『ソロモンの歌』を引き合いに出すと、1977年にこの小説が発表されてから二十年ほどの間に36万部が売れた。ところが1996年の10月にオプラズ・ブッククラブの選定本に選ばれた途端、その日のうちにバーنز&ノーブル書店のチェーン店だけで1万6千部が売れ、最終的には73万部が増刷されたのである。トニ・モリスンが1993年にノーベル文学賞を受賞していることを考慮に入れるならば、オプラのブッククラブに選定されることが、ノーベル文学賞を取るよりもはるかに販売促進になることは明らかだろう。⁴

またトニ・モリスン以外でも、例えば Bernhard Schlink の *The Reader*

(1997) であるとか、Anita Shreve の *The Pilot's Wife* (1998)、はたまた Janet Fitch の *White Oleander* (1999) 等々、オプラの番組が取り上げた本はことごとく、連続 28 冊がベストセラー入りしているし、その他オプラがらみで売れた本はトータルで 2 千万部、この結果 1 億 7 千 5 百万ドルもの大金がそれらの本を出した出版社を潤したと言うのだから、オプラのブッククラブが文学作品の宣伝媒体として非常に大きな力を持っていたことは疑い得ない。⁵

しかし、このブッククラブがもたらしたのは、単に現代小説の順調な売り上げだけではなかった。オプラの番組に触発された女性たちは、ただ現代小説を買って読むようになったのではなかったのだ。彼女たちは、それぞれの居住地において同好の士を集め、同番組の形式を模した自前のブッククラブを結成し、メンバーの自宅を順繰りに会場にしながら、読書会形式で本を読むようになったのである。

先にも述べたように、オプラズ・ブッククラブの特徴は、それが主として女性、それも特に本のことに詳しい読書家や専門家ではなく、ごく普通の主婦を視聴対象とし、いわばそうした素人の主婦が、他の主婦たちと共に、本について心置きなく自由に語り合う雰囲気을大事にしていたことである。そしてオプラ自ら現代小説の内容を自分自身の人生体験に引き付けて語り、ゲストにもそうした読み方を促すことで、どんな素人でも自分なりの語り方で小説のことを語ることを示し、そのように語っていいのだという自信を植え付けた。またそれと同時に、女性たちが一冊の本をめぐるってそれぞれ感想を語り合うことで、非常に親密な時間を共有することができることをも教えたのである。つまりオプラのブッククラブは、世の女性たちに「本を読む楽しさ」を教えただけでなく、「ブッククラブの楽しさ」を、すなわち「一冊の本を女性同士で一緒に読み、かつ語

り合う」ことの楽しさを教えたのだ。⁶

ブッククラブの隆盛

もつとも、と、ここで急いで付け加えなくてはならないのだが、ブッククラブなるもの、特に女性を主たる構成員とするブッククラブは、何もオペラの発明物というわけではなく、そういうものは以前からアメリカには存在した。

例えば Josiah Holbrook (1788-1854) が主導した「ライシウム運動」(Lyceum movement) の影響で、1826年から1840年代前半にかけ、地域住民が互いに教養を高め合うための自主学習センターとして全米各地に3千ほどのライシウム(=文化会館)が作られる、ということがあり、これらのライシウムに設けられた図書室において、地域住民、とりわけ女性たちがしばしば読書会を開き、Brontë 姉妹や George Eliot の作品など、主としてイギリスから輸入された小説を互いに朗読しながら読んだという史実がある。なぜ皆で集まって本を読んだのかと言えば、一つにはこの当時、本がまだ高価なものであり、その貴重な一冊の本を皆で朗読する形でしか読書体験を享受できなかったからである。またこの当時、小説本、特にロマンス小説は、それを読んだ女性に空想癖を植え付け、悪影響を与えるものと見なされていて、世の男性たちは自分の妻がそうしたものを自宅で読むことを善しとしなかったため、女性たちは読みたい本を読むにも、男性(=夫)の目を避けてこそこそと読む必要があった。19世紀半ばという時代、アメリカの女性たちがライシウムの図書室を「女の領域」と見なし、三々五々ここに集っては密かな集団読書の悦楽に浸ったのには、そうせざるを得ない事情があったのだ。ちなみに、19世紀末に入ってライシウム運動自体が終焉を迎えた後も、この種の図書室と読書会は引き継が

れ、現存するアメリカの公共図書館の実に 75%はこうした女性の読書会を母体として設立されたというのだから、今日アメリカで図書館の有難味を享受する者は皆、古の「本を読む女性たち」に感謝しなければならないわけだが、いずれにせよ、その時点から数えるとすれば、アメリカにおける女性主体のブッククラブは、オプラのブッククラブが生まれる前に既に 150 年の歴史を刻んでいたことになる。⁷

そしてこうした自然発生的な読書会を原点としつつ、「近所に住む本の好きな者同士がひと所に集まって本を読み、語り合う場」としてのブッククラブは、その後もアメリカの女性たちの間に連綿と受け継がれ、20 世紀も後半あたりになるとこの種のブッククラブは郊外族の主婦の娯楽の一つとして草の根的に広がっていき、やがてアメリカの中流階級の主婦であれば誰もが一つや二つ所属していて当たり前、というようなものになっていく。その意味でオプラズ・ブッククラブの運営方法は、オプラの独創と言うよりも、むしろもともと一般社会に存在していたブッククラブのあり様を、オプラの側（＝テレビ局側）が模倣したもの、と言ってよいだろう。

しかし、オプラのブッククラブの人气が高まると、今度は逆にこの番組に刺激を受けたアメリカ中の主婦たちが、この番組の形式を模倣した対面型のブッククラブを結成するようになるのも道理であって、その結果、今や全米に 50 万ものブッククラブがあると言われ、それぞれ活発に活動しているというのだから、今、アメリカは、まさに「ブッククラブ・ブーム」の只中にあると言っても過言ではない。⁸

男性とは異なる、女性の本の読み方

ところで、こうした近年流行のブッククラブにおいて重要なのは、本を

読むこと、ではない。と言うのも、「今月はこの本を読みます」という形で課題として指定された本を読むこと自体は、クラブのメンバーがそれぞれ自宅で行なうことであって、皆で集まってすることではないからだ。では（月に一度、といったペースで）ブッククラブに集まったメンバーがそこで一体何をするかと言えば、当該の課題図書について語り合うこと、すなわちディスカッションである。その意味でブッククラブとは、畢竟、一冊の本をめぐるディスカッションのことであると言ってもいい。

が、ここで問題となるのがそのディスカッションの質である。実は、女性主体のブッククラブにおけるディスカッションは、男性には想像のつかないもの、少なくとも男性が「ディスカッション」という言葉から想像する行為とはまるで別物なのだ。

一般に男性がある文学作品について「ディスカッション」と言えば、その作品のどこが良いのか、何故良いのかを議論することを意味するのであって、それはつまり作品の分析をすることに他ならない。ところが女性主体のブッククラブにおいて「ディスカッション」と言った場合、作品の分析は基本的には行われぬ。では何について語り合うのかというと、作品にかこつけて、ブッククラブのメンバーの一人ひとりが自分のことを語るのである。

実際、アメリカのブッククラブでよく使われるディスカッション・テーマの一つは、「当該の作品の登場人物の中で、誰に一番共感できるか」だという。つまりクラブの各メンバーが「私はこの作品の登場人物の中では誰それに一番共感した、何故ならばその登場人物が置かれている立場と非常によく似た立場にかつて自分も身を置いたことがあるからである」というような調子でまず登場人物の誰かに自己投影し、それを話の端緒として、そこから自分自身の過去の経験を滔々と語り出すこと——これこそがブ

ブッククラブにおいて「ディスカッション」と呼ばれているものなのである。換言するならば、ブッククラブにおいて「本を語る」という場合、それは「本について語る」というよりは、むしろ「本をきっかけにして自らを語る」ことを意味するのであって、それは当該の作品に対する理解を深めることを目的としているのではなく、むしろクラブのメンバー一人ひとりが読書行為を通じて自分のくぐり抜けてきた人生のドラマの一場面を再認識し、それによって自分自身についての理解を深めることを目的にしているのだ。無論、そのきわめて個人的なドラマをオープンにし、他のメンバーと共有しながら、メンバー同士が互いに理解を深め合うこともまた、ブッククラブの愉しみの一つであることは言うまでもない。⁹

ブッククラブにおいて、女性たちは、こういう風に本を「語って」いるのである。

また、そうであるからこそ、ブッククラブの運営において「選書」のプロセス、すなわち「何を読むか」を決める作業が重要になってくるのだ。何しろ、メンバー全員が何らかの形で登場人物の誰かに自己投影しようとするわけだから、ブッククラブで読まれる小説は、それを可能にするような作品でなければならない。逆に自己投影のしにくい登場人物しか出てこない小説は「語るに足りない」と判断され、「今月読んだ本はつまらなかった」という結論に至ってしまうのであるから、選書は慎重の上にも慎重を重ねて行わなければならないわけである。

となるとブッククラブで読まれる小説は、まず主人公が女性であること、脇役にしても女性の登場人物が多いこと、登場する女性の多くが中流階級以上であること、そして下品な場面がないことなどの諸条件が重なる文学作品の中から選ばれることになるのも当然で、またそうになると、そういうタイプの小説を書く作家、すなわち女性作家の手になる作品が頻繁に選ば

れることになるのも容易に理解できるだろう。そう言えばオプラズ・ブッククラブで選ばれた本もその大半は女性作家の小説であったが、近年、全米 50 万のブッククラブによって大規模に消費されているのは、まさにそうした「女性の、女性による、女性のための小説」だったのだ。

「ジョナサン・フランゼン事件」とその顛末

中流階級の女性を主人公とし、脇役としても数多くの女性が登場する、そんな女性作家が綴る物語、それを読んだ中流階級の女性たちがブッククラブに集い、その物語について語り合おうと言いつつ、実のところは自らの人生を語り、それをまた同じ階級に属する女性同士が互いに共有し、共感し合う——。今、アメリカで空前のブームとなっているブッククラブの実態は、要するにこういうことなのである。言うまでもなく女性は昔から「読書する性」であったわけだが、今、その特性は前景化し、本を読む主体としてだけではなく、本を語る主体として、檯舞台に躍り出たといい。

ところが、この慶賀すべき状況に一つの「事件」が暗い影を投げかけることになる。現代ブッククラブ史上に悪名高い「Jonathan Franzen 事件」である。

それはオプラズ・ブッククラブの人气が最高潮にあった 2001 年に起った。この年の 9 月、オプラはジョナサン・フランゼンの *The Corrections* (2001)¹⁰ という小説をブッククラブの選定本に選び、いつものように著者本人もスタジオに呼んで、一般視聴者から選ばれた素人読者数名共々、この作品について楽しく語り合おうとしたのである。そしてオプラが『コレクションズ』を翌月の課題図書に選定したらしいという噂が出た時点で、この本の出版元はただちに 50 万部の増刷を決めたというのだから、オプラのブッククラブに選ばれ、その番組に出演することは、フランゼンにと

って悪い話であるはずがなかった。

ところがオプラからのこの申し出に、フランゼンは戸惑った。そして最初にオプラから直接電話で話を持ち掛けられた時にはショーへの出演を一応承諾したものの、それに続く各種メディアからのインタビューの中で、彼はオプラズ・ブッククラブの選定本に選ばれたことへの複雑な思いを吐露し始めたのである。

自分の作品がオプラのブッククラブの選定本になったことをめぐってフランゼンが懸念したことの一つは、例のロゴ・シールであった。先に述べたように、オプラズ・ブッククラブの選定本になると、必然的にそのことを示す大きな「O」の字のシールが『コレクションズ』のカバーに貼られることになる。言うまでもなくこのシールこそ、当該の本をベストセラーに押し上げる強力な推進力になるわけだが、フランゼンはそれを嫌った。そしてあるインタビューの中で「私は独立した作家なのであって、自分の創作物に企業・団体のロゴが貼られることは望まない」と発言し、あたかもオプラのブッククラブに選書されたことが迷惑であるかのような、斜に構えた態度を示したのだ。

無論、そんなフランゼンの態度をマスコミが見逃すはずはなかった。様々な新聞・雑誌がフランゼンを急襲し、こうしたコメントを発したことの真意を糺したのである。それに対し、マスコミ慣れしていないフランゼンは、「オプラの番組を見ているのは女性ばかりだから、この番組に選ばれたことで男性読者を失うのではないかと心配している」とか、「私の作品は高度に文学的なので、オプラズ・ブッククラブを見ているような人たちには難し過ぎるのではないか」といった趣旨の失言を繰り返してしまった。そしてこれら一連の否定的なコメントに激怒したオプラは、ついに同年10月23日、『ニューヨーク・タイムズ』紙の取材に答え、「フランゼ

ン氏は、氏の作品が私のブッククラブに選ばれたことについて明らかに不快に思っているようですが、私とて人を不快にさせるつもりは毛頭ありません。よってフランゼン氏が私のショーに登場することはないでしょう」と絶縁を宣言、かくしてフランゼンはオプラの逆鱗に触れてしまったばかりか、「あの気取った嫌な奴 (that pompous prick)」という汚名を着せられ、世間を、とりわけ全米津々浦々に住む膨大な数のオプラ・ファンの女性たちを、敵に回したのであった。そして一人のナイーヴな文学的エリート主義者が世間から一斉に非難されたこの一連の出来事を、マスコミは嬉々として報道し続けたのである。¹¹

ジョナサン・フランゼンが期せずして集中砲火を浴びてしまったこの「事件」は、アメリカ社会にしばしば見られる「エリート嫌い」の傾向の顕れであり、そうした根強い「反知性主義」のエネルギーが、フランゼンの不用意な言動を恰好の標的として一気に噴出したものと見てよいだろう。しかしそのことはまた、アメリカ社会において高／低文化階級間に一触即発の深い対立が常に存在していることを如実に示している。事実、フランゼンのように公言はしなくとも、オプラズ・ブッククラブの隆盛を苦々しく思い、そういうものに踊らされている人々を下に見て、軽い侮蔑感を抱いている人々は確実に存在する。例えばオプラズ・ブッククラブのロゴにしても、わざわざ『コレクションズ』の出版元に頼んで、オプラズ・ブッククラブ選定本であることを示す「O」マークが表紙に付いていないバージョンの本を注文するような人々も少なからずいるという。¹² つまりフランゼンの書いた優れた文学作品は読みたいが、オプラの番組を見ているような連中の同類に見られるのは恥ずかしいと思っている高踏的な人々、すなわち「ハイブラウ」な人々の数も少なくはないのだ。そしてそういうフランゼン寄りの人々の見解によれば、フランゼンが犯した罪は、

彼が「オプラズ・ブッククラブの支持者たる中流女性読者を蔑視したこと」ではなく、「その本心をうっかり吐露してしまったこと」に過ぎない。フランゼンは、単にエチケットに違反した、というわけである。

ブッククラブ・ブームの只中で

オプラ・ウィンフリーがテレビ番組の一コーナーとして創設したブッククラブの誕生を契機として、それまでは中流階級の主婦の間の静かな娯楽の一つに過ぎなかったブッククラブの人氣が一気に高まり、その結果、女性受けする小説が爆発的に売れるようになった反面、ブッククラブに所属するような中流主婦層（ミドルブラウ層）と、ブッククラブの流行を冷やかに見下す文化的エリート層（ハイブラウ層）との間にある文化的対立がかつてないほど顕在化してしまったということ。これが現在のアメリカにおける「読書」をめぐる状況である。換言すれば、アメリカの読者層全体が「オプラが薦める本を読む層」と「オプラの薦める本を鼻で笑う層」に大きく二分してしまったということ。しかもこの場合、前者と後者の対立はしばしば「女性」対「男性」の対立にもなっているのだから、ことはさらに複雑な様相を呈していると言っていい。

かつてはきわめて個人的な娯楽であった「読書」なるものは、今、ブッククラブの隆盛という現象を通過したアメリカにおいて、人がどの文化的社会階層に所属するかを如実に示す「緋文字」となったのである。

注

- 1 Cecilia Konchar Farr & Jaime Harker, Eds., *The Oprah Affect: Critical Essays on Oprah's Book Club* (State U of New York P, 2008), p84 を参照せよ。
- 2 このパラグラフの記述に関しては上記 *The Oprah Affect*, pp.16-19 の記述を参考にした。
- 3 “Oprah Effect” という用語については、上記 *The Oprah Affect*, p.76、及び Kathleen Rooney, *Reading with Oprah: The Book Club That Changed America* (Second Edition) (The U of Arkansas P, 2005), p14 を参照せよ。
- 4 このパラグラフの記述に関しては上記 *Reading with Oprah*, pp.122-123 の記述を参考にした。
- 5 Jenny Hartley, *Reading Groups* (Oxford UP, 2001), p.4 を参照せよ。
- 6 実際、アメリカの対面型ブッククラブが圧倒的に女性メンバーによって構成されていることは各種調査で明らかになっている。例えばある調査によると、既存のブッククラブのうち、69%が女性だけのグループであるのに対し、男性だけのグループはわずかに3%しかないという。*Reading Groups*, p.25、及び Elizabeth Long, *Book Clubs: Women and the Uses of Reading in Everyday Life* (The U of Chicago P, 2003), p.xiii を参照せよ。
- 7 ブッククラブ、および全米の公共図書館の先駆的モデルとしてのライシウム図書室については、上記 *Book Clubs* の第2章を参照せよ。
- 8 全米各地に点在する対面型ブッククラブの概数については、*Reading Groups*, p.vii、及び *The Oprah Affect*, p.237. に拠った。
- 9 ここまでの数パラグラフの中で述べた「ブッククラブにおける女性メンバーの本の読み方」については、上記 *Book Clubs* の第6章に詳細な説明が

ある。

- 10 Jonathan Franzen, *The Corrections* (Farrar, Straus and Giroux, 2001).
- 11 いわゆる「ジョナサン・フランゼン事件」の顛末については、*Reading with Oprah* の第 2 章、“Jonathan Franzen Versus Oprah Winfrey: Disses, Disinvitations, and Disingenuousness” に詳しい。
- 12 このようなオプラに対する批判については、*The Oprah Affect*, p.34 を見よ。また Cecilia Konchar Farr, *Reading Oprah: How Oprah’s Book Club Changed the Way America Reads* (State U of New York P, 2005), p.53 には、「文学作品を芸能ゴシップのように扱う」という意味を表す “oprahfy” なる新語が紹介されており、一芸能人たるオプラが、あたかもその道の権威であるかのように文学作品の良し悪しを云々することに対する批判的見解が存在していることが示唆されている。

参考文献

- Farr, Cecilia Konchar. *Reading Oprah: How Oprah’s Book Club Changed the Way America Reads*. State U of New York P, 2005.
- Farr, Cecilia Konchar & Jaime Harker. Eds. *The Oprah Affect: Critical Essays on Oprah’s Book Club*. State U of New York P, 2008.
- Franzen, Jonathan. *The Corrections*. Farrar, Straus and Giroux, 2001.
- Hartley, Jenny. *Reading Groups*. Oxford UP, 2001.
- Long, Elizabeth. *Book Clubs: Women and the Uses of Reading in Everyday Life*. The U of Chicago P, 2003.
- Rooney, Kathleen. *Reading with Oprah: The Book Club That Changed*

America (Second Edition). The U of Arkansas P, 2005.

*本稿は日本アメリカ文学会中部支部第30回大会（2013年4月21日、於中京大学）において行なった口頭発表（「本を語る：英米ブッククラブ事情」）を元に、加筆修正を行なったものである。